

2013年度日本カレドニア学会公開講座

スコットランド文化への招待

講座の概要と講師紹介

日本カレドニア学会は、スコットランド文化の啓発をその活動の一つとして掲げており、この考えのもと、2006年より公開講座をはじめました。これまでに音楽、食文化、思想的・文化的風土、ロバート・バーンズなどをテーマとして取り上げ、聴講者から高い評価をいただきました。また、2010年、2011年には「スコットランドの歩き方」をテーマに、様々な土地と文学、歴史、民俗、文化などを取り上げ、さらに昨年は「日本とスコットランド」をテーマに、明治維新以来、日本や日本人がいかにスコットランドと深いかかわりをもってきたかを紹介してきました。

2013年は、「スコットランド文化への招待」をテーマとし、スコットランドの世界遺産、映画・演劇、音楽、魔女狩りにゴルフとウイスキーなど、豊かなスコットランド文化を多彩な講師陣がご紹介します。スコットランドの文化の独自性と豊かさがおわかりいただけますとともに、スコットランドがさらに身近に感じられることと思われれます。

日程

第1回6月1日（土）

1. 13:30-14:50 講師 谷岡健彦（東京工業大学）
「スコットランド国立劇場(NTS)の開設とその後」
2. 15:10-16:30 講師 鈴木真紀（元神戸海星女子学院大学）
「世界遺産を通して知るスコットランドの魅力」

第2回6月8日（土）

1. 13:30-14:50 講師 稲永丈夫（NPO日本スコットランド協会）
「“スコティッシュ・ゴルフ” ホッチ・ポッチ」
2. 15:10-16:30 講師 木戸敦子（関西外国語大学）
「スコットランドの魔女狩りを探る」

第3回6月15日（土）

1. 13:30-14:50 講師 横山正子（桜美林大学）
「メンデルスゾーンの音楽に息づくスコットランド文化」
2. 15:10-16:30 講師 三鍋昌春（サントリービジネスエキスパート株式会社）
「スコッチウイスキーの秘密」

* * * どなたでも聴講できます。お気軽にご参加下さい。 * * *

会場

拓殖大学・文京キャンパス（C館3階 305教室 3日間とも同じ会場です。）

文京区小日向3-4-14（東京メトロ丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩3分）



参加費

各回500円（資料代）

内容と講師紹介

谷岡健彦(たにおか たけひこ)

スコットランド国立劇場(NTS)の開設とその後

文化と政治を安直に結びつけた議論をするのは禁物であるが、トニー・ブレア政権下で進んだ自治権委議の動きが、スコットランドの文化全般に新しい活力を与えたことは否定しがたいように思われる。演劇の世界では、その活力は2006年2月のスコットランド国立劇場(National Theatre of Scotland)の開設というかたちで結実した。日本語ではひとまず「劇場」と訳しておいたが、NTSは自前の劇場も専属の劇団も持たず、作品の企画と制作のみを担当するというユニークな形態の組織である。

NTSにとって幸運だったのは、開設1年目から秀作に恵まれたことだろう。2006年8月に初演されたグレゴリー・バークの『ブラック・ウォッチ』の大成功によって、NTSの名前はイギリス国内のみならず海外においても広く知られるようになった。精強を謳われるスコットランド高地連隊の兵士へのインタビューをもとに構成された本作は、軍隊という切り口から「スコットランドらしさ」なるものを吟味しようとする劇である。今回の講座では、この作品の舞台映像を見ながら、現在のスコットランドの演劇界を概観したいと思う。

プロフィール

東京工業大学外国語研究教育センター教員。現代イギリス演劇専攻。2004年から08年まで、エディンバラのトラヴァース劇場と伊丹市立アイホールとの間の日英戯曲交流プロジェクトに翻訳者と

して関わる。当プロジェクトで翻訳した戯曲に、デイヴィッド・ハロワー『雌鷄の中のナイフ』、グレゴリー・バーク『ガガーリン・ウェイ』、ロナ・マンロウ『アイアン』などがある。そのほか、デイヴィッド・グレッグ『黄色い月』(高田恵篤演出、柄本時生・門脇麦主演)の翻訳を担当。おもな論文に、「スコットランド演劇の新世紀——グレゴリー・バークの三部作——」(『スコットランドの歴史と文化』、明石書店、2008年)など。

鈴木 真紀(すずき まき)

世界遺産を通して知るスコットランドの魅力

現在スコットランドには、「エディンバラの旧市街と新市街」、「ニュー・ラナーク」、「オークニー諸島の新石器時代遺跡中心地」、「セント・キルダ諸島」、及び「ローマ帝国の境界線」の5件の世界遺産が登録されている。その内容は、バラエティーに富み、スコットランドが古代文明から近・現代の文化への長い歴史と共に、豊かな自然にも恵まれた、類い稀な地であることを証明している。スコットランドの世界遺産を学ぶことによって、世界遺産そのものをも深く学ぶことができる。本公開講座においては、単なる「旅行案内」的な世界遺産の紹介にとどまらず、世界遺産の基礎知識と理念についてもお伝えしたい。

5件の世界遺産のすべてをご紹介した後に、そのうちの1件である「ニュー・ラナーク」について、詳しくご説明したいと思っている。「ニュー・ラナーク」は、グラスゴーの郊外に位置し、「エディンバラ」に次いで、訪れやすい場所なので、スコットランドを旅行される際には是非、計画に入れていただければ幸いである。

プロフィール

世界遺産検定マイスター、NPO法人世界遺産アカデミー認定講師、トラベルカウンセラー推進制度協議会認定世界遺産スペシャリスト。神戸市生まれ。神戸海星女子学院大学英文学科卒業後、海外旅行添乗員として約5年半で約900日世界中を廻る。1985年に渡英、約23年間ロンドンで暮す。1989年に英国政府公認の観光ガイドの資格(ブルーバッジ)を取得、日本からのお客様に英国の魅力を伝え続けた。2011年度の1年間は、母校＝神戸海星女子学院大学の観光ホスピタリティー学科にて、講師を勤めた。

稲永 丈夫(いななが ますお)

“スコティッシュ・ゴルフ” ホッチ・ポッチ

スコットランドの魅力には、一言では言い尽くせない濃密な多様性がある、誰にとっても何か訴えるものがあるのだが、中でも“ゴルフ”は、太古からの自然と人々の営みの中らごく自然に生まれたゲームだけに、この国の魅力をすべて総合し合わせ持つ奥行き、深さを感じさせてくれる。だから、その魅力を短時間で語り尽くすのは到底叶わないことだが、そのホッチ・ポッチを、次のようなテーマに絞ってお話したい。

1. ゴルフはどのようにして生まれたか—生まれ育った地“リンクス”とは何か。

2. ゴルフの精神とは？ゴルフは、通常“レフェリーのいない唯一のスポーツ”だが、レフェリーがいなくてもゲームが成り立つのは何故だろうか。
3. ゴルフの“スコットランドらしさ”とは？
4. 有名人(メアリー女王、コナン・ドイル、ショーン・コネリー等々)とゴルフ
5. スコットランドでのゴルフの楽しみ方(稲永流！?)

プロフィール

1936年鹿児島指宿生。1958年大阪外大(現大阪大)卒業、住友商事入社、主に鉄鋼輸出に携わり、メキシコ、ブラジル、イングランド(ロンドン)に通算20年駐在、最後はジェットロ駐在員としてスコットランドのグラスゴーに2年間滞在して、同国の対日輸出促進に当る。爾来スコットランドにはまり込み、ゴルフと日ス交流史の研究を趣味とする。NPO日本スコットランド協会、日本カレドニア学会、スコットランド・グローバルネットワークに所属。

木戸 敦子(きど あつこ)

スコットランドの魔女狩りを探る

イギリスと魔術の関係は「ハリー・ポッター」シリーズなどの影響もあり、現在では幅広い層の人々の関心が高まり、テレビなどでもこれまで以上にイギリスのミステリーをテーマとした番組を目にするようになってきた。そのイギリスにおいて実は中でも幽霊、妖精、魔女、妖怪など様々な超自然的なものが数多く存在するスコットランド、そこはかつて大規模な魔女狩りが行われた場所でもあった。魔女狩りの実態は地域や時代によって大きな違いが見られ、イングランドとスコットランドの魔女狩りにも魔女裁判記録などを通じてその性質の違いが見えてくる。一般的に有名な魔女狩りの例としてイングランドにおけるものがよく取り上げられるが、実際はスコットランドの方がより激しく悲惨であったのではないだろうか。今回の講座では、スコットランドの魔女狩りの実態とその社会的背景及び民俗学的背景を考察したい。

プロフィール

関西外国語大学准教授。博士(言語文化)。スコットランド留学時に学んだ社会学をきっかけに魔女狩り研究との縁が始まる。しかし実はホラーなどが大嫌いな小心者。南の島を夢見ながらも、魔女狩りにおける北欧文化の影響が知りたくなりスコットランドの次はアイスランドに留学経験あり(方向音痴?)。共著『スコットランド文化事典』(原書房、2006年)、『スコットランドの文化と歴史』(明石書店、2008年)など。

横山 正子(よこやま まさこ)

メンデルスゾーンの音楽に息づくスコットランド文化

ドイツの作曲家メンデルスゾーン(Felix Mendelssohn Bartholdy, 1809~1847)はユダヤ人銀行家の裕福な家庭に生まれた幸福人という印象があるが、その短い生涯は内面的苦悩を背負った

ものだった。1829年、20歳の時に初めて英国を訪れ、ロンドンで成功をおさめたあとスコットランドを旅している。もともと彼は文学などを通して、スコットランドに関心を抱いていた。この旅でエディンバラからヘブリディーズ諸島までを周遊し、ハイランドの荒野をただ一人放浪もした。「霧とメランコリーのスコットランド」と自ら呼んだこの国、雨のそぼ降る荒涼とした土地とその背後にある歴史とは、ユダヤ人でありながらドイツで生きる彼のディレンマに満ちた心と呼び合うものがあったのではないだろうか。この講座ではメンデルスゾーンの生涯を紹介したのち、スコットランドから靈感を得た作品を鑑賞しつつその音楽に息づく彼にとってのスコットランドを発見したい。また絵画にも長けていた彼の筆によるスコットランドの風景スケッチも紹介したい。

プロフィール

桜美林大学教授。横浜国立大学大学院修了、ドイツ・メンデルスゾーン＝バルトルディ音楽院留学、2011年～2012年エディンバラ大学客員研究員。専門は西洋音楽史（18～19世紀プロテスタント圏教会音楽）。現在は特にイングランド、スコットランドのオルガン製作史に関心を持っている。論文「メンデルスゾーンと19世紀イギリスのオルガン」（『桜美林論集』2007年）、「オルガン建造の背景——イングランドの例を中心に」（『桜美林論考・人文研究』2011年）他。

三鍋 昌春(みなべ まさはる)

スコッチウイスキーの秘密

今、世界的なウイスキーブームである。また、ウイスキーの生産国は20ヶ国以上にのぼる。量的にはインディアンウイスキーが最大だが、質量ともに世界に認められているのはスコッチ、アイリッシュ、アメリカン（バーボン）、カナディアン、ジャパニーズで、世界五大ウイスキーと呼ばれている。その中で最大の存在はスコッチウイスキーだ。そのスコッチウイスキーに製法を学んだジャパニーズウイスキーも近年、世界的に非常に高い評価を受けるようになった。

スコッチは、多彩な香り・味わいを持つ。特に注目すべきは果実の香りや味わいを持っていることである。原料が大麦芽であるにもかかわらず、なぜこの香味を身に付けたか？そこにはこの国の歴史が大きな役割を果たしていた。

本講座では、スコッチがいかにして魅力的な味わいを獲得しウイスキーの王者となったのかに焦点を当て、スコットランドの歴史をたどりながら味わいの進化の過程を解き明かしていく。併せて、なぜ日本のウイスキーがスコッチに範を取ったのかについても、その経緯を紹介する。

プロフィール

1978年農学部農芸化学科（微生物利用学）卒。1980年修士課程修了、サントリー入社。1989～93年スコットランド留学学位取得、スコッチ実習・研修。1994年白州蒸溜所製造技師長。1998年生産第1部課長兼主席ブレンダー。2002年原酒生産部長兼シニアブレンダー。2006年品質保証本部長。2012年品質保証本部シニアスペシャリスト。

著書『ウイスキー 起源への旅』（新潮社、2010年）。